

# iWork (Pages や Keynote) を PDF にする

## 1. 「ファイル」を選択

Pages **ファイル** 編集 挿入 フォーマット 配置 表示 共有 ウィンドウ ヘルプ

名称未設定 — 編集済み

表示 拡大/縮小 ページを追加 挿入 表 グラフ テキスト 図形 メディア コメント 共同制作 フォーマット 書類

### 絵のない絵本

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

矢崎源九郎訳

ふしぎなことです！ わたしは、なにかに深く心を動かされているときには、まるで両手と舌とが、わたしのからだにしばりつけられているような気持になるのです。そしてそういうときには、心の中にいきいきと感じていることでも、それをそのまま絵にかくこともできなければ、言い表わすこともできないのです。しかし、それでもわたしは絵かきです。わたしの眼が、わたし自身にそう言い聞かせています。それに、わたしのスケッチや絵を見てくれた人たちは、みんながみんな、そう認めてくれているのです。

わたしは貧しい若者で、たいへんせまい小路の一つに住んでいます。といっても、光がさしてこないというようなことはありません。なにしろ、まわりの屋根ごしに、ずっと遠くの方まで見わたすことができるほど、高いところに住んでいるのですから。この町にきた、さいしょのころは、ひどくせまくるしい気がして、さびしい思いをしたものです。それもそのはず、森やみどりの丘のかわりに、地平線に見えるものといえば、ただ灰色の煙突ばかりなのですからね。おまけに、ここには、友だちひとりいるわけでもありませんし、あいさつををかけてくれるような顔なじみもなかったのです。

ある晩のこと、わたしはたいへん悲しい気持で、窓のそばに立っていました。ふと、わたしは窓をあけて、外をながめました。ああ、そのとき、わたしは、どんなに喜んだかしれません！ そこには、わたしのよく知っている顔が、まるい、なつかしい顔が、遠い故郷からの、いちばん親しい友だちの顔が、見えたのです。それは月でした。なつかしい、むかしのままの月だったのです。あの故郷の、沼地のそばに生えている、ヤナギの木のあいだから、わたしを見おろしたときと、すこしもかわらない月だったのです。わたしは、自分の手にキスをして、月にむかって投げてやりました。すると、月はまっすぐわたしの部屋の中にさしこんできて、これから外に出かけるときには、まい晩、ちょっとわたしのところをのぞきこもうと、約束してくれました。そのときからというもの、月は、ちゃんとこの約束を守ってくれています。ただ残念なのは、月がわたしのところに、ほんのわずかの間しかいられない、ということです。でも、くるたびごとに、その前の晩か、その晩に見たことを、あれこれと話してくれるのでした。

「さあ、わたしの話すことを、絵におかきなさい」と、月は、はじめてたずねてきた晩に、言いました。「そうすれば、きっと、とてもきれいな絵本ができますよ」

そこでわたしは、いく晩もいく晩も、言われたとおりにやってみました。わたしは、わたしなりに、新しい「千一夜物語」を絵であらわすことができるかもしれません。でも、それでは、あまりに数が多すぎます。わたしがここに書きしるすものは、勝手に選ばされたものではなくて、わたしが選んだとお

テキスト

段落スタイル\*

スタイル レイアウト 詳細

フォント

ヒラギノ明朝 ProN

W6 14 pt

B / U \*

文字スタイル なし\*

配置

間隔 28.8 pt

箇条書きとリスト なし

## 2. 「書き出す」を選択

The screenshot shows the Pages application window. The 'File' menu is open, and the '書き出す' (Export) option is highlighted with a red box. The document title is 'Hans Christian Andersen'. The right sidebar shows the 'Text' style settings, including font (Hiragino Maru Pro N), size (14 pt), and paragraph style (なし\*).

メニュー項目: 新規... (⌘N), 開く... (⌘O), 最近使った項目を開く, 閉じる (⌘W), 保存... (⌘S), 複製 (⇧⌘S), 名称変更..., 移動..., バージョンを戻す, **書き出す**, ページレイアウトに変換, ファイルサイズを減らす..., 詳細, パスワードを設定..., テンプレートとして保存..., ページ設定... (⇧⌘P), プリント... (⌘P)

名前未設定 — 編集済み

表 グラフ テキスト 図形 メディア コメント

共同制作 フォーマット 書類

段落スタイル\*

スタイル レイアウト 詳細

フォント

ヒラギノ明朝 ProN

W6 14 pt

B / U \* 色

文字スタイル なし\*

配置

間隔 28.8 pt

箇条書きとリスト なし

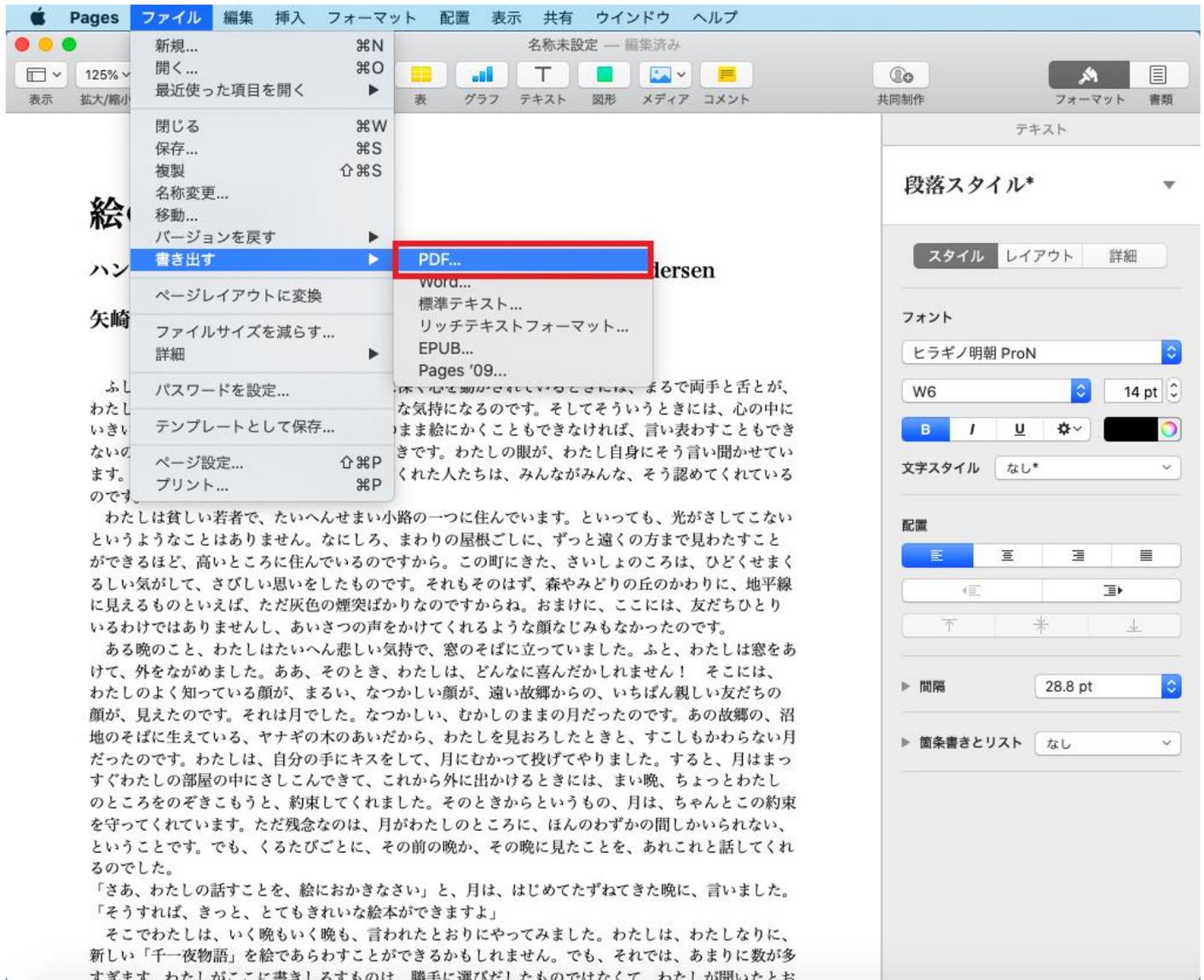
わたしは貧しい若者で、たいへんせまい小路の一つに住んでいます。といっても、光がさしてこないというようなことはありません。なにしろ、まわりの屋根ごしに、ずっと遠くの方まで見わたすことができるほど、高いところに住んでいるのですから。この町にきた、さいしょのころは、ひどくせまくるしい気がして、さびしい思いをしたものです。それもそのはず、森やみどりの丘のかわりに、地平線に見えるものといえば、ただ灰色の煙突ばかりなのですからね。おまけに、ここには、友だちひとりいるわけではありませんし、あいさつの声をかけてくれるような顔なじみもなかったのです。

ある晩のこと、わたしはたいへん悲しい気持で、窓のそばに立っていました。ふと、わたしは窓をあけて、外をながめました。ああ、そのとき、わたしは、どんなに喜んだかしれません！ そこには、わたしのよく知っている顔が、まるい、なつかしい顔が、遠い故郷からの、いちばん親しい友だちの顔が、見えたのです。それは月でした。なつかしい、むかしのままの月だったのです。あの故郷の、沼地のそばに生えている、ヤナギの木のあいだから、わたしを見おろしたときと、すこしもかわらない月だったのです。わたしは、自分の手にキスをして、月にむかって投げてやりました。すると、月はまっすぐわたしの部屋の中にさしこんできて、これから外に出かけるときには、まい晩、ちょっとわたしのところをのぞきこもうと、約束してくれました。そのときからというもの、月は、ちゃんとこの約束を守ってくれています。ただ残念なのは、月がわたしのところに、ほんのわずかの間しかいられない、ということです。でも、くるたびごとに、その前の晩か、その晩に見たことを、あれこれと話してくれるのです。

「さあ、わたしの話すことを、絵におかきなさい」と、月は、はじめてたずねてきた晩に、言いました。「そうすれば、きっと、とてもきれいな絵本ができますよ」

そこでわたしは、いく晩もいく晩も、言われたとおりにやってみました。わたしは、わたしなりに、新しい「千一夜物語」を絵であらわすことができるかもしれません。でも、それでは、あまりに数が多すぎます。わたしがここに書きしるすものは、勝手に選んだものではなくて、わたしが聞いたとお

### 3 「PDF…」を選択

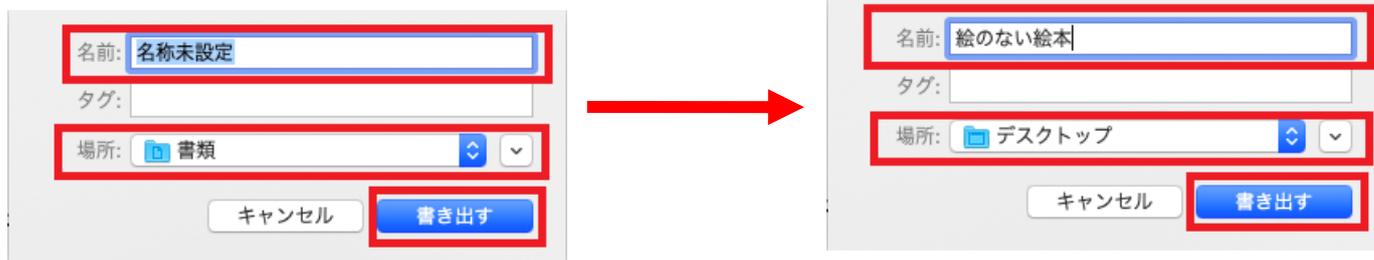


### 4. 「標準」を選択

※ファイル容量を小さくするため



## 5.任意のファイル名（名前）、保存場所（場所）を決め「書き出す」を押す



## 6.任意の保存先に保存され、ファイルが表示される。

